

3、村境の祈祷札と山城地方の境界意識

横出洋二（技師）

はじめに

山城地方における境界呪物としては、カンジョウナワがよく知られており、すでに当館の館報で各々の事例を報告した。^(註1)しかし、新たに祈祷札も境界呪物としてあることが今年度の村境の調査でわかった。今回はそれについて報告し、さらにカンジョウナワの事例を含め同地方における境界意識について検討してみた。

山城地方において現在村境に祈祷札を立てる地区は長岡京市浄土谷と宇治田原町奥山田である。前者は正月のオコナイ行事において後者は年3回のヒマチ行事に関連して札を立てる。まず最初、具体的に行事を含めその内容を報告する。

1、長岡京市浄土谷のオコナイと祈祷札

イ、浄土谷地区概観

浄土谷地区は長岡京市西部の山中にあり、狭い谷間の西北に集落・寺・神社が固まっている。集落のある谷筋（イスタン）と北に峠を一つ越えた谷（ハコダニ）に水田がまとまっている。周囲はすべて山林で、竹の他杉・桧が植林されている。集落の中央を南北に市道が通り、北の市街地と南の大阪府島本町山崎とを結ぶ主要な幹線となっている。

近世は仙洞御領で石高は58石余りであった（天保郷帳）。明治23（1890）年に下海印寺・奥海印寺・金ヶ原村と合併して海印寺村となり、さらに昭和28（1953）年に新神足村・乙訓村と合併して長岡町の一地区となった。

寺は浄土宗西山派の乗願寺で、全戸がこの檀家である。本尊は平安時代作の阿弥陀如来坐像で、京都府指定となっており、地元では大^{おお}仏と呼ばれている。氏神は寺に隣接して建

つ御谷神社で、社殿は小さいが、式内社に比定されている。集落の谷向かいの山中に埋墓（オボリバカ）と石塔墓（セキトウバカ）がある。戦前は稲・竹の子・薪・柴の生産が主な生業だった。今は薪・柴の代わりに植林がなされ、椎茸栽培も行われている。

ロ、オコナイ

オコナイは毎年1月21日に乗願寺と当屋で行われる。朝10時頃各家の戸主が寺に集まると、住職が本尊前で祈祷の読経を始める。神明帳を読むところでランジョウを行う。住職が鈴を鳴らして合図すると、堂内の2人が鉦と太鼓を叩き、堂外の縁で他の者がウルシの板をウルシの棒で叩く。

読経が終わると、各自ゴーサンと祈祷札をもらい当屋の家に向う。ゴーサンはウルシの棒の端に半紙を巻き、その先にベンガラを塗ったものである。仏名・牛玉宝印の文字や宝珠の印は記されていない。ゴーサンは春の苗代作りのとき苗代にさす。

当屋では、住職が仏壇の前で読経する。各戸主が念仏を唱和するとき、2人が鉦と太鼓を叩く。終わると当屋の振舞いで会食が行われる。

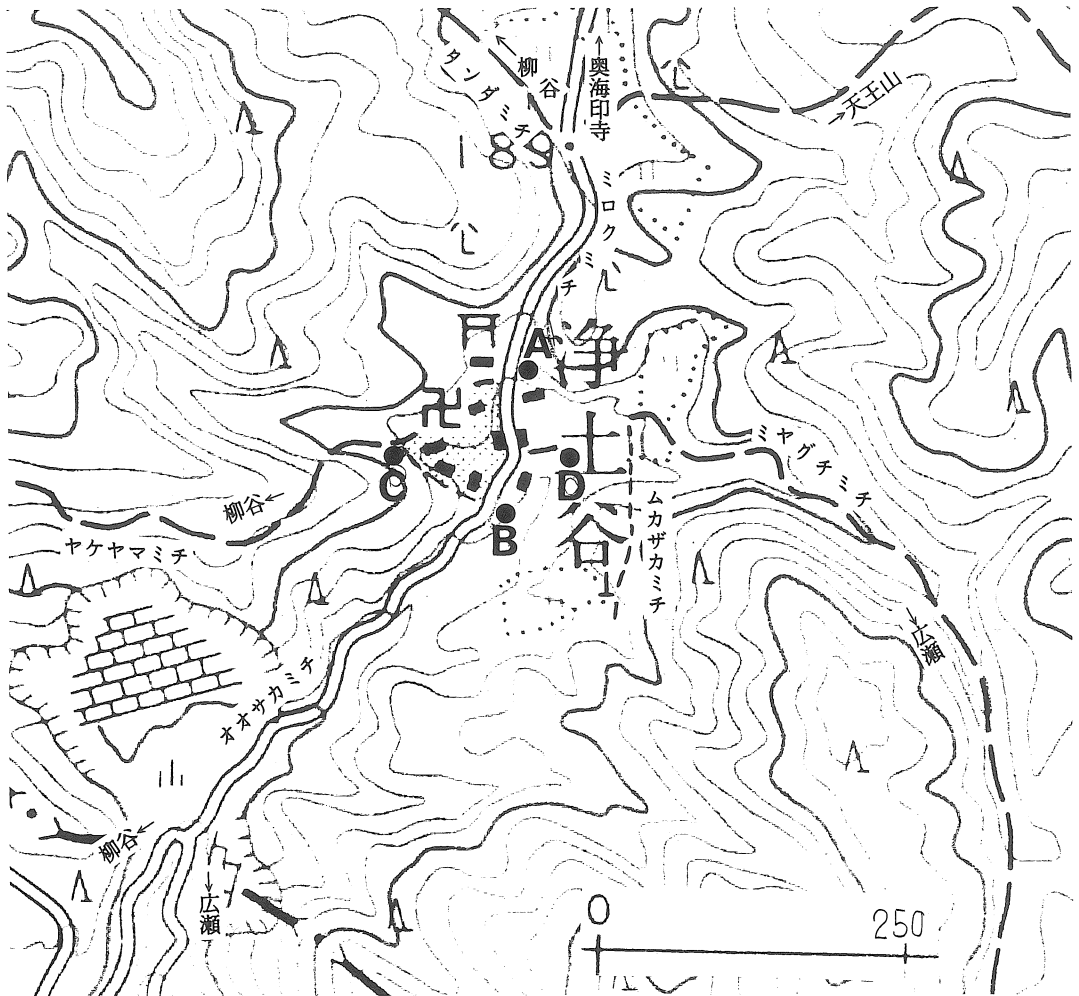
ハ、札立て

午後散会した後、当屋が木製の祈祷札をA～Dの4箇所の集落入口に立てる（図1）。札の木は35、7×8×1cmの板で当屋が用意し住職が次の文字を記して宝印を押してゴーサンと一緒に仏前で祈祷する。

（表） 天下泰平

奉唱弥陀名号壹百万遍区内安全祈攸

五穀成就



浄土谷祈祷札位置図

(裏) 平成五年正月 大仏

次に札を立てる場を詳しく見てみると、Aは麓の奥海印寺区を通過して長岡京市街地へ行く道（ミロクミチ）の口である。Bは水無瀬川沿いに大阪府島本町へ向う道（オオサカミチ＝イスタンミチ）の口で、同町広瀬で国道171号線と合流する。Cの口からの道は細い谷筋の地道で（ミヤグチミチ）、途中水無瀬川に出てオオサカミチに合流する。Dの口からの道も細い地道で、西の山の裏側にある柳谷観音へ続いている（ヤケヤマミチ）。このように祈祷札は他地区とを結ぶ4つの道の口に立てられていることがわかる。

道の利用について、オオサカミチ・ミロクミチは竹の子など産物を山崎駅などに出荷するのに利用した。薪・柴も女の人がセオイヒモで背にになって奥海印寺や尺代地区などの村々を売りにまわった。小学校は奥海印寺にあったので子供はミロクミチを通学で往復した。この道は途中ハコタニで西の楊谷寺に向うタンダミチと分かれている。乗願寺の大仏は柳谷観音の母親という信仰から楊谷寺参詣者は先に大仏にお参りに来た。そのためオオサカミチやハコタニから楊谷寺に向うタンダミチは春ごろ参詣者でにぎわった。ミヤグチミチも山崎方面に出るのは早いといって利用する人もいた。この道もDの札場を過ぎたと



ミヤグチミチの祈禱札



オオサカミチの祈禱札

こで墓地に行くムカイザカミチとに分かる。

さて札に対する祈願は、家に配る札に「五穀成就」と「万民豊楽」と記され、家の繁栄が祈禱の中心であることがうかがえる。

日月清明

奉祈禱天下泰平五穀成就万民豊楽如意吉祥
災難不起

それに対し、木札は「区内安全」が中心に書かれていることから、区内の災難防除が祈願の中心と考えられる

2、奥山田の日待行事と祈禱札

イ、奥山田地区概観

奥山田は宇治田原町の東端に位置する地区である。東は滋賀県信楽町朝宮地区、北は同県大津市大石地区、西は宇治田原町湯屋谷地区、南は和東町湯船地区と接している。宇治田原町の他の地区は郷の口の盆地とそこから分かれる谷筋にあり、西流する田原川の水系に属している。しかし、奥山田は北流する奥山田川の水系にあり、大きく谷を異にする。

地形は平地のない山間地で、地区中央の比較的広い南北の谷筋に沿って集落がある。谷は大きく東西に分かれ、東の谷の奥に茶屋村・栢村・木元の集落が、西の谷は上に川上、下に宮村がある。東側の谷筋に沿うように国道307号線が通り、信楽や宇治方面に行く主要な幹線となっている。川は西の谷間を奥山田川が流れ、東の谷を流れる里川と木元の集落下で合流して北流し、大石の淀町で瀬田川に合流する。

産業はかつては農林業が主で、谷筋で稲作を、山間で炭焼きやマル（桶・樽のくれ材）作りそして茶園栽培を行っていた。今は区外へ勤めに出る兼業農家がほとんどである。

神社は宮村に奥山田全体の氏神である天神社がある。近世まで社殿に北接した場所に宮寺の長福寺があったが、明治の神仏分離によって廃寺となり、敷地に奥山田小学校が建てられた。また明治8（1875）年まで宮座が4座あり、秋の祭礼で能楽の奉納を行った。今は各集落一人づつ選出される氏子総代が運営の責任者となり、隔年交代の宮守2人が祭礼準備や掃除など管理に当たる。

寺院は、茶屋村に遍照院、栢村に元性院、木元に西光院、川上に正寿院とだいたい集落ごとにある。いずれも真言宗で正寿院・遍照



奥山田祈禱札位置図

院が高野山派、元性院が大覚寺派、西光院が智山派である。檀家は寺院のある集落の各家であるが、寺院のない宮村は正寿院を檀家寺とし、また木元には元照院や正寿院、栢村には遍照院・西光院の檀家もある。なお元性院は長福寺の仏像を受け継いでいる。

古い時代は不明だが、中世には大炊寮領の御稲田があって、住民は同寮の供御人であった。^(注2) 近世は山田村として、672石余(天保郷帳)の村高があった。しかし、実際には、茶屋村・栢村・宮村・川上村に分かれ、各村に庄屋・年寄がいた。^(注3) なお木元は栢村に含ま

ていた。近代以後、明治7(1874)年に4村合併して奥山田村となり、さらに明治22(1889)年に禅定寺・湯屋谷・岩山・立川村と合併して宇治田原村に、そして昭和31(1956)年田原村との合併で宇治田原町の一地区となった。^(注4)

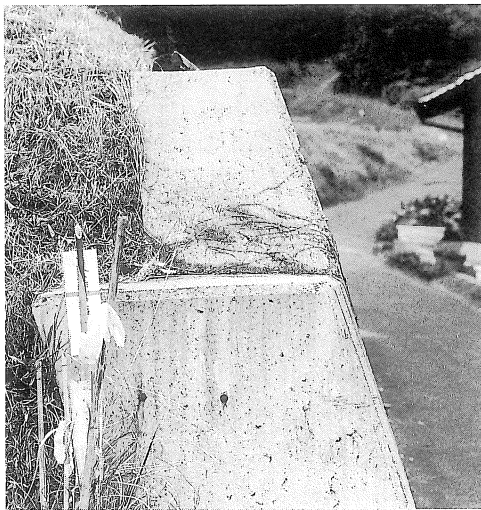
ロ、奥山田の日待行事

奥山田では、集落ごとに日待を行っており次に各日待を具体的にみてみたい。

茶屋村 茶屋村では1月13日・4月1日・9月1日の夜、遍照院で地区の戸主が参列して行く。ただし不幸事のあったヒの悪い人は



茶屋村祈祷札④



宮村祈祷札⑤右は墓地とナガオミチへの道出席しない。以前は、4月の日待は5月1日に行い、また昼間行ったという。

行事では、全員が本堂に着座した後、住職が祈祷の読経をする。祈祷の対象は雨宝童子の掛軸で本堂の右側面に祭壇を設け、供物をする。

読経後、庫裏に移り会食を行う。地区の軒数は32軒で、これが3つの村組に分かれており、各組交替で日待の宴席の世話をする。当番の組ではさらに宴席での幹事役としてシルタキという当番を決める。昔はシルタキと各組から料理を一品づつ持寄った。昔は5月1日の日待を待って農作業を始めたため、つらい仕事が始まる5月の日待の会食を「地獄の日待飯」と言い、逆に稲穂が稔り、刈取を待

つだけとなった9月の日待の会食を「日待の極楽飯」と言った。

会食の後、住職が書いて本堂で祈祷した札をいただいて帰る。家に配る札とは別にムラの3箇所を立てる札がある。立てるのは檀家総代か日待に参加した人で札立て場に近い家の人に頼む。

栢村 栢村では1月4日に元性院で行う。檀家7軒が集まり、住職が天照皇大神の掛軸を掛け、その前で祈祷する。その後、当屋の接待で会食をする。各檀家へのお札の配布はなく、辻の札立てもない。

木元 木元では1月7日・5月1日・9月1日の年3回西光院で行っていたが、今は5月は行わず、1月と9月の2回だけである。木元は21軒あり、その内9軒が西光院の檀家で日待には檀家の人が参加する。寺は無住であり、住職は京都市伏見区竹田にある真言宗智山派安楽寿院の住職が兼務している。

行事は午後からで、本堂に適宜座った後、住職が護摩を焚いて祈祷する。祈祷の対象は本尊阿弥陀如来の厨子の前に掛けた雨宝童子の掛軸である。祈祷が終わると参列者一人一人焼香する。その後、当番が用意した料理で会食してから祈祷札をもらって帰る。この札は住職が書いて用意する。当番は行事後の適当なときに祈祷札を集落の2箇所に立てる。

川上 川上では1月14日・5月1日・9月1日の夜に檀家の人が正寿院に集まり行く。まず住職が雨宝童子の掛軸を対象に祈祷を行う。掛軸は本堂の仏間横の座敷の床の間に掛ける。祈祷中に全員で般若心経を唱和する。祈祷が済むと、川上区総代から連絡事項が伝達され、その後会食する。会食の準備や宴席での世話は隣組が交代でつとめる。会食後に祈祷した札をもらって帰るが、集落2カ所を立てる札は当番の組長が翌日立てる。

宮村 宮村では1月15日・6月25日・9月1日の午後にトウヤの家で戸主が参列して行く。6月は奥山田のノヤスミの日にあたる。トウ

ヤは、地区21軒の家が交替で2軒づつ当り、場所はどちらかの家を使う。行事はまず正寿院住職の祈祷から始まる。祈祷の対象は床の間に掛けられた雨宝童子の掛軸で、祈祷中に全員で般若心経を唱和する。祈祷が終わると会食をする。経費はトウヤが各家を回って一律に集める。会食後、祈祷した札をもらって帰る。札は家の神棚に納めるだけで、田畑にさしたりするようなことはない。集落に立てる札は、トウヤが集落の2カ所に立てる。

ハ、奥山田の旧道と祈祷札

以上みたよう栢村を除き各集落ともに集落の境に札をシノブ竹にはさんで立てる。各札には以下のように記されており、ともに区内安全と書かれ、五穀成就を書かない集落もあるので札はムラ内に災害や疫病が起こらないことを主たる祈願目的としたものであると考える。

梵(ア) 奉修日天供区内安全祈收	茶屋村
梵(ア) 奉修日待区内安全五穀成就祈收	川上
梵(ア) 奉修日待区内安全五穀成就祈收	宮村
梵(ア) 奉修日待供区内安全五穀成就祈收	木元

次に札を立てる位置を旧道との関係を確認してみたい。現在、奥山田区と他をつなぐ幹線ルートは国道 307号線であるが、この道が開通したのは大正2 (1913) 年のことである。以前は、湯屋谷地区の石詰の谷を通して、奥山田の川上集落の北端に出る信楽街道が主要な道であった。街道はさらに川上の集落を通り峠を越えて茶屋村集落に出て現在の国道と合流して信楽に向かう。以前は牛の背やロクシャ (大八車) を人や牛で引いて炭・マル材などを信楽街道を通して郷ノ口方面に運んだが、街道は道幅が狭く急な峠道もいくつかあった。そのため上りの峠道では、荷が重くて車が上らないため、荷をいったん車から降ろして車と荷を別々に上げたり、同道者の牛を使って2頭で引っ張り上げた。

郷ノ口へ行く道は信楽街道とは別に長尾道があった。これは川上から信楽街道を西に少し戻った松峠から宮村の西の尾根筋を北へ向い長尾地蔵へ行く道で、地蔵のところで西に向う京道と北に向う瀬田道とに分かれる。京道は2つほど峠を越えて湯屋谷の長通に抜ける道である。瀬田道は滋賀県小田原町を通り大石から瀬田へ出る。製茶時期が近づくと瀬田道を通して、ジョタンに貼る反古紙や箒・笠などを瀬田まで買いに行った。なお地蔵を東へ行くと木元の集落に出る。

松峠も分岐点で同じく地蔵が祀られ、東へ川上、西へ湯屋谷、北へ長尾地蔵へ向い、南への道は鷲峰山へ行くことができ者が往来したという。以上の道がかつては奥山田と他地区とを結ぶ道であった。他には茶屋村から栢村・木元、川上から宮村・木元を結ぶ区内の道がある。

さて祈祷札は以上の道沿いに立てられる(図2)。まず、茶屋村はABCの3箇所、Aは集落の東端の国道脇、Bは逆に西端の国道脇であり、Cは川上から来た信楽街道が集落にさしかかった所である。川上は信楽街道沿いの道脇DEの2箇所、Dは集落東端の峠、Eは信楽街道が西の谷に入ってきた、宮村へ行く道との分岐点である。宮村は川上・木元間の道沿いのFG2箇所である。Fは集落中央の辻で、長尾街道と墓地とに行く道の分岐点である。Gはムラの北端国道との交差点である。木元はHIの2箇所で、Hは神社脇を通して宮村から来た道が川を渡ったツジと呼ぶ所、Iはムラの西はずれのシモジと呼ぶ所の道沿いである。シモジで再び川を渡り西の峠道を登ると長尾地蔵の辻に出る。

3、村境と祈祷札

村の境界の問題については、柳田国男の『石神問答』以来民俗学における主要なテーマとして論じられてきた。一つは民間信仰の研究から道祖神を代表とする境界呪物の祭祀

や性格に関する研究があり、^(注5) もう一つは村落の領域概念やそれと関連した村落組織や村人の生活と村境意識との関係に関する研究がある。^(注6) 浄土谷・奥山田の村境の祈祷札についてもオコナイやヒマチ行事での位置付けの問題もあるが、今回は後者の問題からとらえ、祈祷札を村の領域論の中で位置付け、両地区の人々の村境意識についてみてみたい。

イ、行政村とムラ

学術用語の「ムラ」は集落としての意味以外に生産・生活を共にする村落共同体組織を意味するものとしても使う。そこで日本の村を見た場合、行政的な村が共同体のムラと同じでなく、近世においても1つの村にいくつものムラがある場合も多かった。

近畿地方では行政村とムラとが一つである場合が関東・東北などの遠隔地の村に比べ比較的多い。しかし、先に述べたように奥山田地区は中世以来「奥山田郷」として一つの地域を成し、近世の郷帳でも奥山田村として石高が計上され、天神社を共通の氏神としていたが、実質的な生活・生産活動を共通するレベルでのムラは異なり、茶屋・栢・川上・宮村・木元の5つのムラに分かれていた。ヒマチをはじめ伊勢講など講ごととは各ムラで行われ、墓地もムラごとにある。これをふまえてムラ境の祈祷札をみた場合、札は同じ谷筋にある川上・宮村でも互いに別のムラであるというムラ人の心意を象徴している。つまり祈祷札は行政的な村と生活レベルのムラとの違いを示してくれている。

ロ、ムラ境

福田アジオ氏がよく知られた村落の領域概念によると、村内の領域をムラを中心にムラ(集落)・ノラ(耕地)・ヤマ(山)と同心円的に区分している。^(注7) それからすると各領域間にも境が想定されるが、実際それらの境の中で最も重要視されたのがムラとノラの境である。そのことは道祖神・勧請縄・石仏・大草鞋・祈祷札などの防災の呪物がムラ・ノラ

の境に多く置かれたことからうかがえる。そのことはまた守るべき最も重要な領域はムラ、つまり住民が寝食を営む集落であり、そこが内なる領域で、田畑や山林は外の領域であることを示している。浄土谷・奥山田の場合、山間の村落であるため単純に同心円の領域概念に当てはまらないが、大まかにムラと谷間の水田、それを取り囲む山とに分かれている。札を立てる場合は宮村のF以外すべてムラ境であり、札は、守るべき「区内」はムラであり、札の向こうは外であるとの住民の意識がうかがえる。山間の両地区は立地条件から山城の平地の村に比べ家の密度が低く、後者ほどムラ境が明確でない。そのため逆に札がムラの境を明確に示す役割を果たしている。

次に原田敏明は村境をムラの出入口の道路であるとした。^(注8) つまりムラとそれを取り囲むノラ・ヤマとの接点がすべて境でなく、ムラ境として認識されるのはムラから伸びる道路上の出入口である。村境は線でなく点として示される。両地区の祈祷札も外の区へつながる主要な道沿いに立てられ、「区内安全」をおびやかすものは道をつたってやってくるという観念がみてとれる。

ハ、複数の村境

それと奥山田地区で注目したいのが、地蔵とサイノカミである。木元を除き各ムラともムラはずれの道沿いに地蔵が祀られており、位置からして境界仏として祀っていると考えられる。地蔵は先に述べたように長尾と松峠にもある。その他茶屋村の東、信楽と殻池峠越えで和束へ行く道との分岐点近くには幸神社を祀っている。^(注9) 祭神は現在イザナミノミコトであるが、本来は境界神のサイノカミである。祈祷札を含め奥山田全体の境界呪物の配置を見た場合、最も外側に長尾・松峠・幸神社、次にムラはずれの地蔵、そして祈祷札というように3重の境界設定がうかがえる。

伝承の面からもう少しみてみると、大正頃伊勢参りのとき、大津方面から帰ってきた一

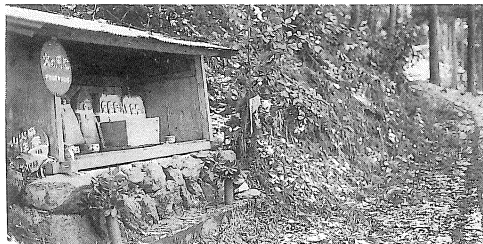
行を長尾地蔵の辺りで村人が迎え、そこでちょっとした食事をした。つまりここが坂迎えの場所であったことがわかる。次に松峠に関する伝承として、ここに大鳥居があり、注連縄を張って子供が嘸したといひ、また奥山田の寺院はすべて真言宗だが、これはこの峠で浄土宗の布教師を追い払ったためだという。そしてこの近くに奥山田で亡くなった無縁仏を葬った正夜塚があったという。その他、木元のはずれにカワヅリとよぶ谷の最下部で、奥山田川が峡谷に入るところがあり、ここで雨乞いするときペンズリサンとよぶ萱で作った蛇を流した。

以上の伝承もふまえて奥山田郷全体からみると長尾地蔵・松峠・カワヅリ・幸神社が不安な外の世界との最も外側の接点であり、そして祈祷札の場所が最も内側の境界で、寝食を営むムラと外の接点つまり最後の守るべき境界とみることができる。

以上、2地区の祈祷札について述べたが、これらの事例は行政的な村と生活レベルでのムラとの違い、ムラとノラの領域概念など現在の民俗学における村境に関する一般的概念を示してくれる資料であり、祈祷札を含め今のところ山城地方において浄土谷・奥山田以外にムラ境にこのような明確な呪物を毎年定期的にまつる地区は少ない上でも貴重な資料である。また、奥山田においては、呪物と伝承からムラ以外に郷という広い領域での境界が設定できることも指摘した。

4、山城地方の境界意識

冒頭で述べたように当地方でも、近畿地方の代表的な境界呪物であるカンジョウナワが比較的多くみられる。しかし、20例のうち10地区は神社境内であり、残りも山の神のほこらや川であり、祈祷札のように明確にムラ内への災厄防除のため、かつムラの口を示すように置くところは限られる。その中で境界呪物的意味あいとしてムラへの災厄の侵入を防



茶屋村の地蔵 道は信楽街道

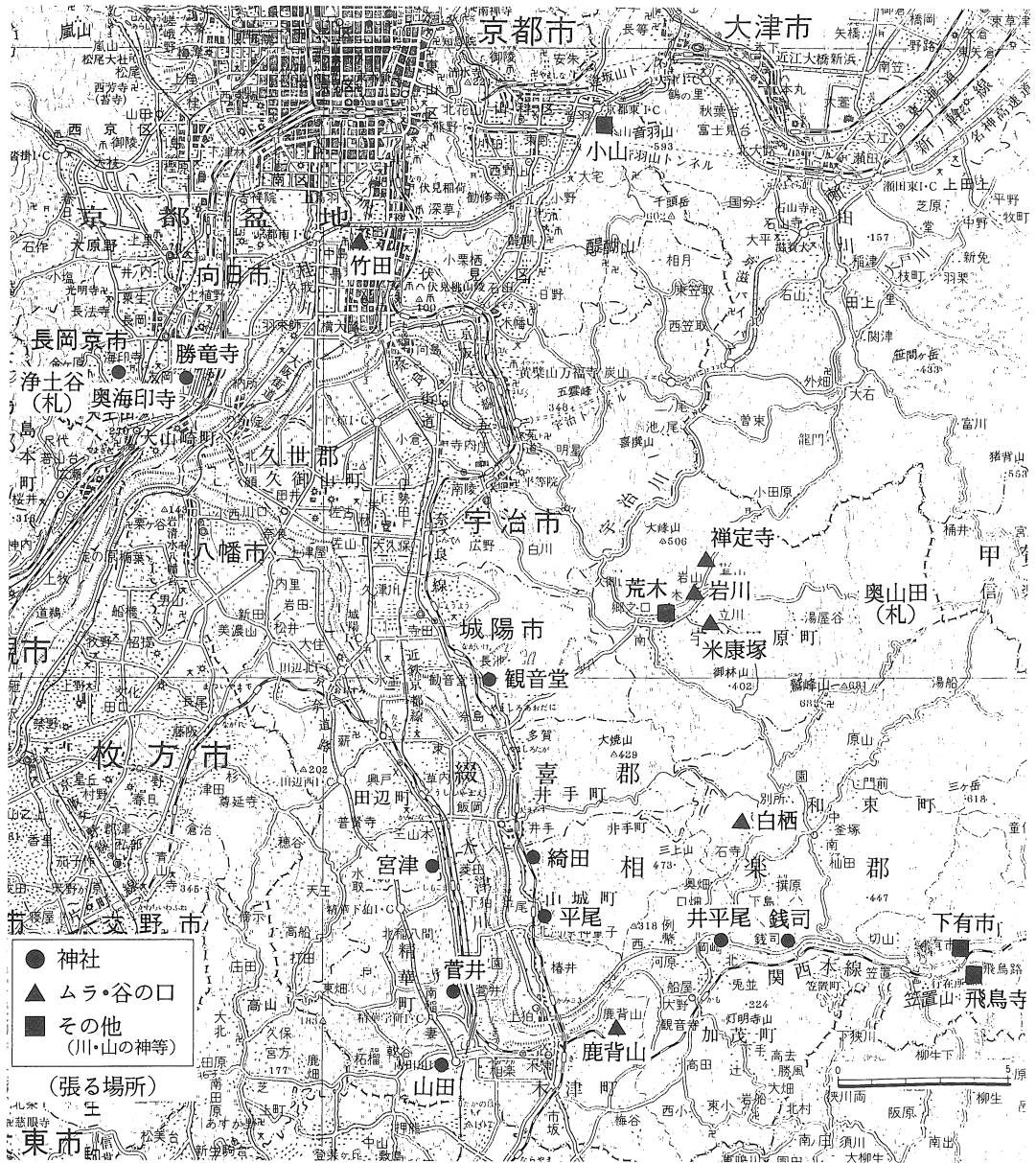


松峠 左が長尾街道、中央が信楽街道
右端に地蔵祠の屋根と鷲峰山への道が見える

ぐ形で張るカンジョウナワは宇治田原町禪定寺・岩山・糠塚・和束町白栖・木津町鹿背山のものである(図3)。これらの地区はいずれも山間地であり、岩山・白栖を除き他は三方を山に囲まれた谷間であり、カンジョウナワは谷の口に置かれる。また糠塚以外は一応ムラ境とみられる所に張る。^(註17)

以上山間の地区に対して平野部にある地区のカンジョウナワは竹田を除きみな神社境内に吊られ、視覚的にムラの境界防除としての意味合いを示すものはない。このことは山間地と平野部との境界の意識差をうかがわせる。つまりカンジョウナワや祈祷札など民俗行事の上だけからすると、平野の地区の境界意識は薄いといえる。

しかし、年頭の境界儀礼がないからといって実際平野の地区がムラの境界意識が薄いかどうかは即断できない。たとえば久御山町や城陽市でかつて行われていた疱瘡神送りなどに境界意識が見えたりする。これは疱瘡にかかった家がムラの辻に赤御幣と赤飯を供えて



山城地方のカンジョウナワ分布図

疱瘡神退散を祈る習俗であり、各地で行われていた。久御山町市田ではムラの南の境の辻に赤御幣を立て赤飯を供えた。^(注12) 城陽市枇杷庄ではムラの北や西の口のイジ(井路)に同様の御幣と小豆飯を供えた。^(注13) 疱瘡神をムラの外へ退散させる行為に日頃隠れていたムラの境界が示され、認識される。

さらに、城陽市では見張りのためのバンコ

小屋や門の伝承が報告されている。^(注14) 同市寺田では市役所のところにヒガシノダイモン、近鉄寺田駅のところにニシノダイモンがあり、バンゴヤ(番小屋)が置かれていたという。寺田は現在広く宅地化されているが、伝承の両位置はちょうど旧寺田村のムラの東西の口に当たる。鳥羽・伏見の戦いの際に敗兵防御のためバンゴヤに竹やらいを設置したとの伝

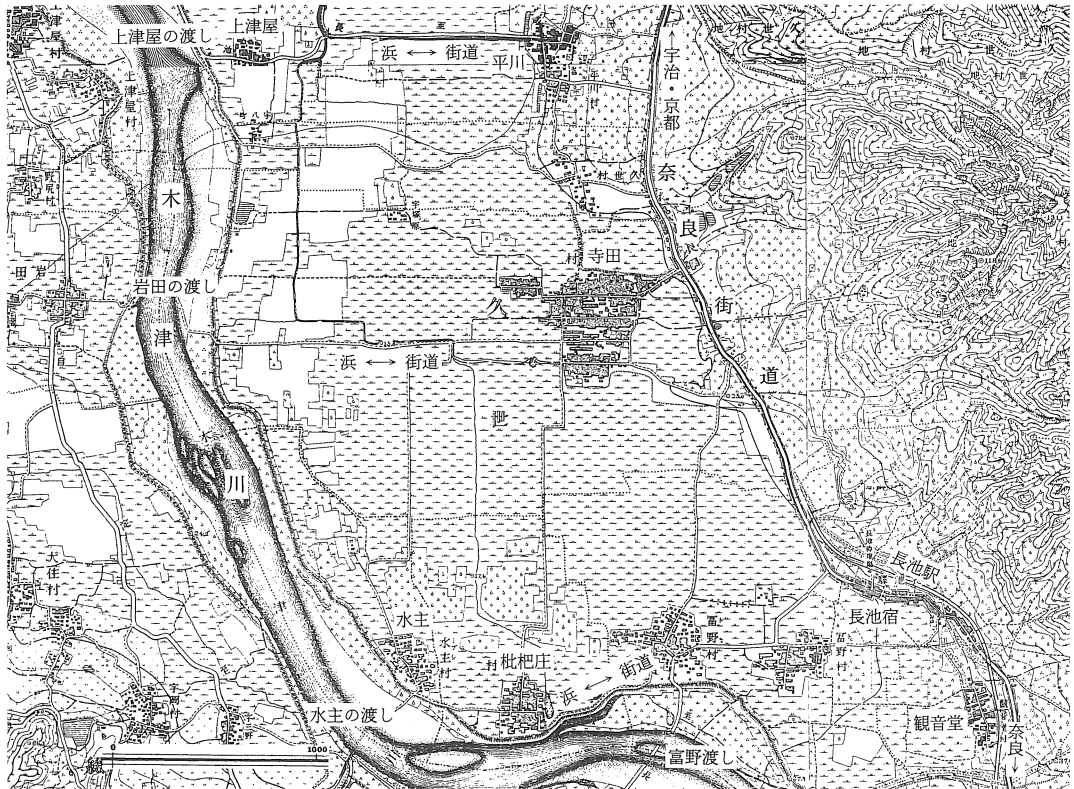
承もある。バンゴヤについてはバンコ小屋と称して同市の平川・枇杷庄・観音堂地区にも見張り場としてムラの口にあったとの伝承がある。平川はムラの東西、枇杷庄はムラの西口付近・観音堂はムラの北と東南の口にあったという。

以上のムラを城陽市域の中北部の景観からみた場合、東端を奈良街道が南北に通り、西端を同じく南北に木津川が流れている(図4)。川沿いには対岸との渡しや、薪・肥料などの荷揚げ、米など農産物の荷積みの浜がいくつかあり、浜と街道との間を旅人や他村の村人がムラの中を通り往来した。たとえば市西北の川に面した上津屋にも八幡市上津屋との渡しがあり、県祭りでは八幡市側からの参拝人は城陽市上津屋のムラ中央を通り、平川のムラを通過して奈良街道に出て、新田から宇治に向った。上津屋の渡しの船頭は村人の希望者の中から選ばれた者が昼夜交替でつとめ、夜

でも人を渡すことはしばしばであった。枇杷庄の隣の水主地区の渡しも木津川左岸と右岸の村々を結び、近代には府営となった主要な渡しであり、旅人は枇杷庄から富野のムラを通り、街道の宿場長池に出たと考える。^(注15) 観音堂は街道に隣接し、ムラの北・東南のバンゴヤは街道へ出る口にあたる。

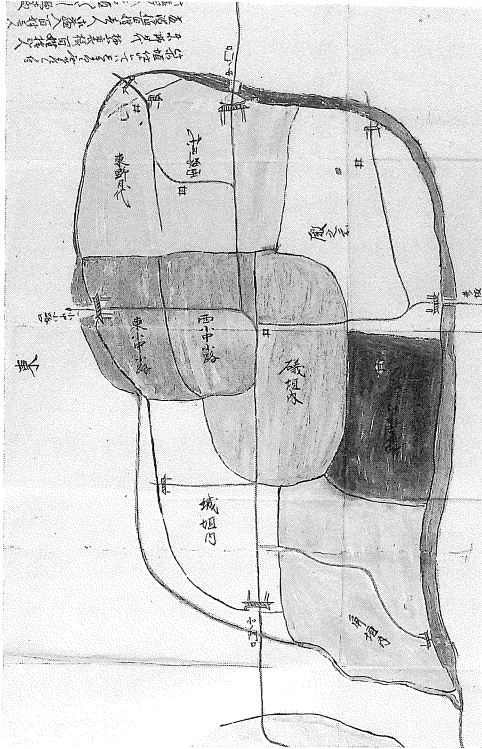
城陽市の門・番小屋はまだ伝承の域であるが、山城町上粕の大里地区には実際近世にムラの口に門があったことが史料から確認できる。同地区は還濠集落で、周囲を濠で囲まれている。正徳5(1715)年の「上粕郷絵図」には濠を渡る8つのムラの口に門が描かれている。ムラの中央を奈良街道が通っていて、街道とムラとの南北の出入り口にあたる中ノ門口と北ノ門口の門は夜間閉じられ、夜番が^(注16)門番をした。

以上の番小屋や門の事例は平野の村落においてもムラ境に対する意識は薄くなかった、



明治期の城陽市域の村落景観

仮製2万分の1地形図



上狛郷絵図 山城町上狛 柳沢保家蔵

むしろ山間の地区より強いものがあつたことがうかがえる。平野部には奈良時代以前、平城京から延びる北陸道や山陽道が通り、中世・近世にかけても京都・奈良間を結ぶ奈良街道が通り、街道には宿駅が設けられるなど古くから人の交通量が多い地域であつた。また、山で隔てられることなく隣村と接する地形であり、他村の村人同士の接触も山間地に比べ多かつたであろう。そうした環境からして門・バンゴヤの事例を含め平地の村の方がむしろムラ境への意識が高かつたと考えられる。

しかし、集落景観からしても家の密度の高い集村落であり、ムラの口は奥山田のような山間に比べより視覚的に明確であるにもかかわらず、境界呪物の設置や儀礼が見られないという特徴がある。それは、以上述べた山地と平野の村の境界物の比較からして、山城地方では、人の往来や接触の少ない地理的に孤立した山地の村では疫病など目にみえない災厄への警戒意識が強く、上述のような地理的



現在の上狛中ノ門付近 手前は環濠にかかる橋。中央の道が奈良街道



奥山田の景観 木元のカワジリ辺から東の谷を望む。最奥が茶屋村

な条件の平野の村では人災とかの直接的な災厄への警戒意識が強いというように「区内安全」を脅かす災厄への意識の差が祈祷札などの呪物と門という境界物の差を生み出したのではないかと推察される。

おわりに

山城地方における境界意識の地域差を一般化するには、平野でも多く見られる地蔵やサイノカミの伝承、また虫送りなどの行事の調査などもふまえて明らかにしていく必要がある。また、行事や儀礼でみせる象徴的な境界だけでなく住民が実際ムラのどのあたりで内・外を感じるのか調査する必要がある。

(1) 印南敏秀「南山城のカンジョウナワ」(『山城郷土資料館報』第3号、1985)。この報告後に見つかった事例を含めて、現在山城

地方でカンジョウナワの行事を行っている地区は22ヶ所である。今年4月発行の展示図録『村をくぎるもの』（京都府立山城郷土資料館、1995）の表では18例だが、発行後、和束町白栖・京都市山科区小山の各1ヶ所新たに明らかになった。

(2) 『宇治田原町史』第1巻（宇治田原町1980）

(3) 「旧奥山田村史抜抄」（宇治田原町史編さん委員会『宇治田原町史参考資料』第12輯、1979）

(4) 『宇治田原町史』第2巻（宇治田原町1988）

(5) 柳田国男「石神問答」（『定本柳田国男集』第12巻 筑摩書房、1969）

倉石忠彦『道祖神信仰論』（名著出版、1990）
笹本正治『辻の世界』（名著出版、1991）

(6) 原田敏明「村境と宗教」（『宗教と社会』東海大学出版会、1972）

福田アジオ『日本村落の民俗的構造』（弘文堂、1982）

垂水稔『結界の構造』（名著出版、1990）

(7) 福田アジオ前掲注6同書

(8) 原田敏明前掲注6同書

(9) 幸神社は天神社境内に末社として祀られているが、これは明治になって合祀したものである。現在茶屋村に祀っている社は後に茶屋村の方が、霊夢によりもとあった現在地に祀りなおしたもので、茶屋村で祀っている。
(10) 注連縄はカンジョウナワであるかもしれない。

(11) 丹後地方には、カンジョウナワと同様な呪物でジャズナがある（井ノ本泰「丹後の道切り行事」『民俗文化分布圏論』名著出版1993）。いずれも龍頭をかたどり、ジャ・ワアワサン・シシなどとも呼ばれるが、いずれもムラ境の木に張ったり、掛けたりして、神社に掛けるところはない。そして多くの地区が四方あるいは三方を山に囲まれ、他から独立した地形の山・漁村である。なお宮津市

今福のジャズナは現在神社境内の木に掛けるが以前はムラの西の口の木に掛けた。

(12) 『久御山町今昔』（久御山町郷土史会1981）文献には四つ辻とあるが、現地で確認したところほぼ旧集落の南の口にあたる。

(13) 城陽市教育委員会の城陽市民俗文化財調査（1990～1992年、筆者も調査員の一人として参加）における聞き取り調査で採集。

調査結果は『城陽市民俗調査報告書』第1集（城陽市教育委員会、1995）に報告予定。

(14) 前掲注12同書。

(15) 前掲注12同書および筆者聞き取り調査

(16) 『山城町史』本文編（山城町、1987）

最後に、本報告執筆にあたり、宇治田原町奥山田の高木英三・久野村寛順・杉山浩義氏長岡京市浄土谷の湯川タカ子・湯川勘一・日下俊文氏から各地区の行事および伝承を教えてください、また京都府立丹後郷土資料館の井之本泰氏には丹後の道切り行事についてご教示をいただいた。ともにお礼申し上げます。